

ジュール・ブルグワン (Jules Bourgoïn) とハンベリー・ハンキン (Hanbury Hankin) といってもほとんどの人が知らないと思われるが、この時代に重要な図版を収める本を出版した。

ジュール・ブルグワンは 1838 年生まれでパリ国立高等美術学校を卒業後、フランス領事館の仕事でアレクサンドリア、ダマスカス、カイロなどに赴任。アラブ美術にすっかり魅せられて 1867 年「アラビア美術」出版。1973 年には、最も独創的な幾何学的装飾の研究書である「装飾の理論」を出版。スチュアート・デュラント「近代装飾事典」によると、パリの美術学校エコール・デ・ボザールの装飾の教授も務めたようだ。

ハンベリー・ハンキンは 1865 年生まれでロンドンのケンブリッジ大学卒業後、トリニティカレッジの病理学研究所に勤務。ベルリンのロバート・コッホ、パリ・のルイ・パスツールの下で働いた後に、細菌学者、化学調査官、政府アナリストとしてインドに赴任した。そこでコレラやマラリアなどの病原菌研究で数々の論文を著し、研究書を出版した。その傍ら、インド滞在中にムガル美術に興味を持ち、その幾何学模様に関する論文も著した。それが「サラセニックアートの幾何学模様の描画」「幾何学的な唐草模様を描く方法の例」(1925) などである。ハンキンにとっては余儀的な楽しみで書かれたものだが、後の数学者たちの目に留まる内容が含まれていた。1920 年代初頭にイギリスに戻った後も、このイスラム幾何学研究の他にも、帆船の新しいデザインや船酔い研究をしたり、自家製エアグライダーにトライしたり、教育や人間について洞察する本を出したり、好奇心の趣くままに精力的に活動して 1932 年に生涯を閉じた。

さて、下にブルグワンとハンキンの図版を載せる。今ではネットに情報が出ているので、そこから図版を引き出すことができる。ブルグワンの図 1 は美術家ならではの構造研究がおこなわれ、職人やデザイナーに役立てられる内容となっているのに対して、ハンキンの図 2 はあきらかに科学者の目で模様にしそむ基本構造を探りだしている。イスラム幾何パターンのもつ魅力に取り憑かれると、みなこのような道を歩みはじめる。私も同じようなことをしているので、とても親近感を覚えるのである。オーウェン・ジョーンズやラシネによる博物誌的な装飾図版集は役割を終えて、次なる関心は装飾の構造に推移していったといえよう。ルイス・デイの『パターン・デザイン』が出版されたのも 1903 年であり。この頃が装飾において最もホットな時代であった。

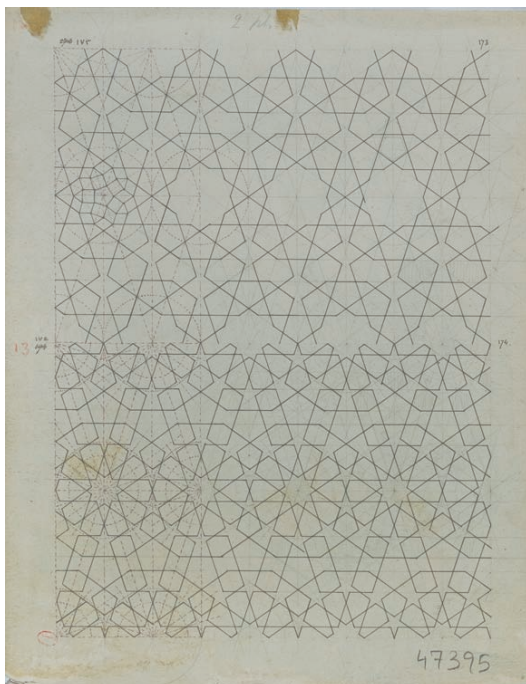


図 1. ブルグワンの図版

<https://twitter.com/ArnaudDescombes/status/963761710585786368/photo/2>

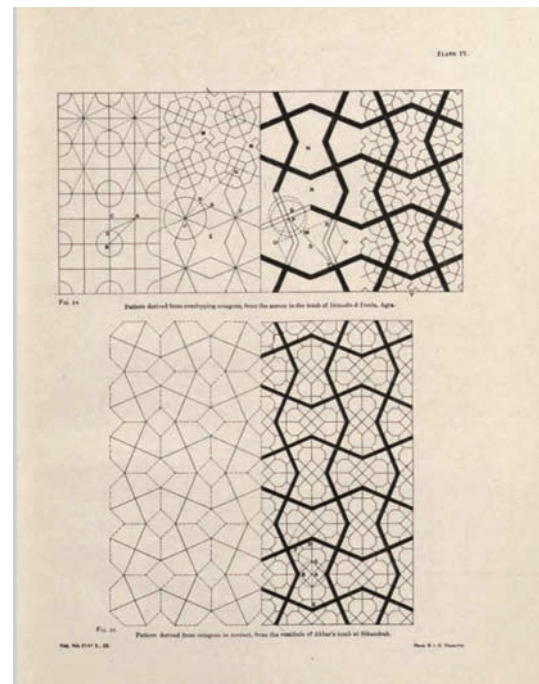


図 2. ハンキンの図版

<https://fi.pinterest.com/pin/413838653247116881/>

本格的に模様に興味を持った二十代後半に、ルイス・デイの『PATTERN DESIGN』に出会った。100 年以上前に書かれた本だが、模様制作の手引書として現在でも十分に通用する。そのせいか Dover の復刻版で今でも入手できる(同じく復刻版でタイトルも同じのCHRISTIEによる『PATTERN DESIGN』も好書)。逆にいえばこの100年の間に、これを超える手引書は出ていないことをも意味する。私はデイの本をもう一步掘り下げた内容の本を探したが見つからず、結果的には自分が探し求める本は自分で書くことになってしまった。それが『連続模様の不思議』(岩崎美術社、1998年)であった。

デイの『PATTERN DESIGN』で優れた箇所はよく考えられた図版にある。下に表紙(図-1)と本文中の図版(図-2)の載せる。図-1では正三角形グリッドをもとに作り出される模様が、図-2では正方形グリッドをもとに作り出される模様が一目で把握できるよう収められている。現代の数学の知見では、敷き詰め可能な正多角形は正三角形・正方形・正六角形角の3種しかないこと、しかしながらその3種でほとんどの模様が作られることが確かめられているが、この数学の知見が及ばなかった100年前にデイは感覚的にそれを図版で示していた。この他にも、リピートのなかで図柄が自然に散らばる方法など、実用ガイドをしても他にはない取り組みがおこなわれている。

ルイス・デイは1845年、ワイン商の息子としてロンドンで生まれた。ステンドグラス、テキスタイル、陶器、カーペット、壁紙などのビジネスやデザインの活動を通じてウィリアム・モリスと知り合い、アーツ・アンド・クラフツ運動に加わった。クリエイターとして生活什器のデザインをいくつか残しているが印象は薄く、装飾デザインに関連する本を数冊書いた以外はあまり知られていない。私の知るところでは、日本趣味であったことやモリスの社旗主義思想には否定的であったらしいことぐらいしか情報が無い。しかし私にとっては『PATTERN DESIGN』で充分であり、私のなかではモリスやアーツ・アンド・クラフツ運動を超えるほどの大きな存在なのである。

2015年に私は『装飾パターンの法則』(三元社)という本を出したが、このタイトルは当然のことながらジョーンズの『装飾の文法』を意識したものだ。そして冒頭ではデイの『PATTERN DESIGN』に言及して、あらためて謝意を掲げるほどに、私のなかではデイは生き続けている。

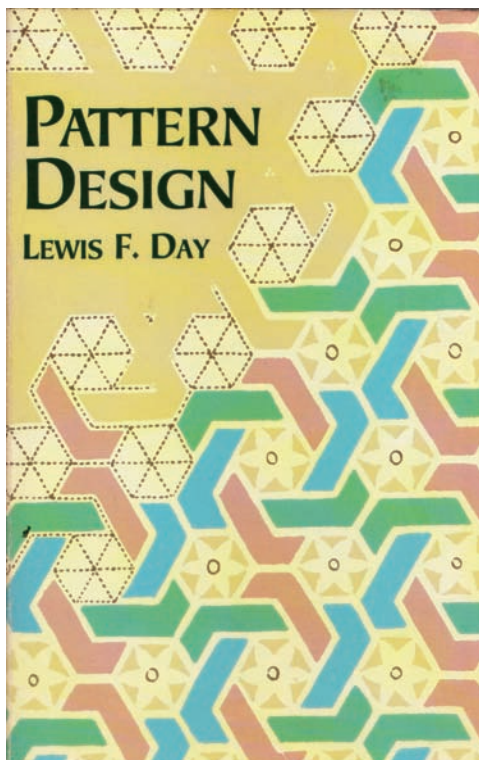


図 1. Dover 復刻版

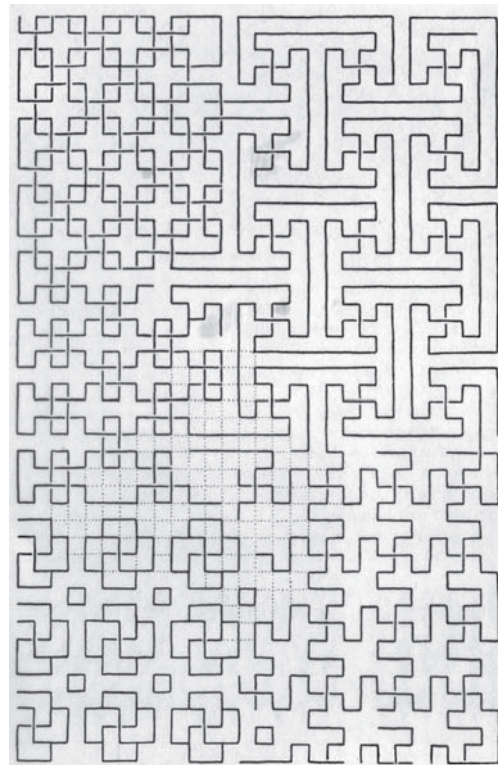


図 2. 図版の一例